

社会的ジレンマ状況における 他者の協力性を見極めと一般的信頼の関係

○橋本博文¹・井富田清香¹・井谷田林士²

(¹安田女子大学心理学部, ²大正大学心理社会学部)

問題と目的

本研究の目的は、他者の協力性を見極め能力と一般的信頼の関係を分析することにある。これまでの社会・進化心理学的知見は、他人を信じる人は「お人よし」といった世間一般のイメージとは真逆の結果を示してきた。例えば、菊池・渡邊・山岸（1997）は、他者一般に対する高い信頼傾向の持ち主（以下、高信頼者）ほど、他者の信頼性についての判断がより正確であることを明らかにしている。本研究では、先行研究の知見を踏まえつつ、社会的ジレンマ状況における協力行動に焦点を合わせ、一般的信頼が他者の協力行動の見極めを正確にするという理論仮説を検証する。

方法

実験参加者 女子大学生 112 名。

一般的信頼の測定 一般的信頼・社会的用心尺度（Yamagishi & Yamagishi, 1994）の 10 項目を用いた（全くそう思わない（1）から強くそう思う（7）までの 7 件法）。

社会的ジレンマゲーム 実験参加者には手持ち金として 500 円を与えた上で、そのうちのいくらかを 100 円単位で自分の属するグループ（11 名から 16 名）のために寄付することができること、また寄付された金額は実験者により 2 倍に増額され、グループのメンバー間で平等に分配されることを教示した。実験参加者自身にも自分のグループの他のメンバーの寄付の 2 倍の $1/n$ （ n =自分を含めた集団サイズ）が与えられることを強調した。（ただし、グループの他のメンバーは実験参加者がいくら寄付したかを知ることができないため、実験参加者がいくら寄付するかは他のメンバーがいくら寄付するかとは無関係であることについても強調した。）この実験状況は社会的ジレンマの三条件を満たしており、個人の利益と集団の利益がかみ合わない状況として設定されていた。こうした状況下で、実験参加者は手持ち金 500 円のうち何円寄付するのかを google フォームを介して 100 円単位で回答した。またその回答後、実

験者は、実験参加者に自分のグループのメンバーがそれぞれ何円寄付したかを一人ずつ正確に予想させ、他者の協力行動の見極めについても測定した。（実験中の回答に対する匿名性が保証されている点は何度も強調した。）

結果

他者の協力性を見極めがどの程度正確なものだったのかを「見極めの正確さ得点」（0 から 1 の値をとる）として指標化し、その得点を従属変数、一般的信頼尺度（ $\alpha=0.77$ ）の得点を独立変数とする回帰分析を行ったところ、決定係数は有意となり（ $R^2=0.07, p<.01$ ）、一般的信頼が他者の協力性に関する見極め正確さ得点を高めること（ $B=0.04, p<.01$ ）が明らかにされた（図 1）。

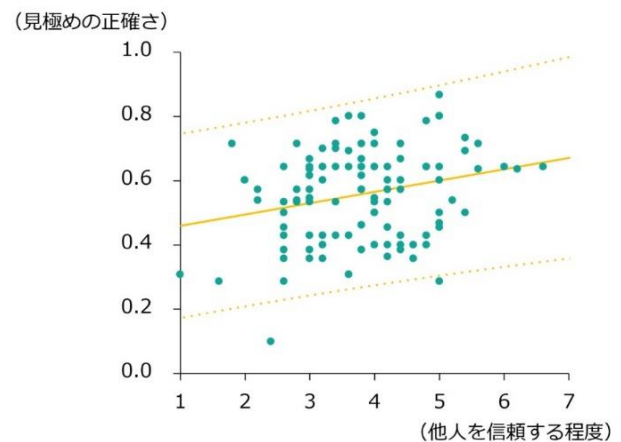


図1 他人を信頼する程度と他人の信頼性を正確に見極める力の関係

考察

本研究の結果は、高信頼者は騙されやすいお人よしではなく、協力できる人間を正確に見極めることができる人であるとの従来の知見を再現するものであった。この結果は「信頼の解き放ち理論」（山岸, 1998）の妥当性を示す結果といえる。しかし本研究の結果においては、社会的ジレンマゲームにおける個々人の協力性と他者の協力性を見極めの正確さの間には相関がみられなかった。一般的信頼と協力性、そして協力の見極めの関係について、追加のデータを加えるかたちでより詳細に分析していくことが今後の課題である。